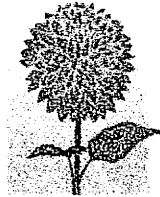


処理を考える(33)



# 11月

## 図・表・写真などの処理 その7

終りに

実際に読みはじめたら、図なら図を説明して、また次に読み進んで行くわけですが、その時に私たちが陥り易い大きな間違いは、図は図として、単独にその図の説明を一生懸命してしまう。本文とは別のものとして図の説明をしてしまう、ということです。図の説明としてはちっとも間違っていない、一定の範囲で正しく説明している、でも本文を理解する上で、大切なことが入っていない。或いは入っていても、長い説明の中に埋もれてしまって、印象に残らならず、次の本文につながって行かないということがあるわけです。見えたままを細かく説明すればいいというわけではないのです。まず大切なのは本文、そのために図の説明が必要であれば、そこにポイントを置いて説明する必要があります。図の説明としては的確であっても、そのために本文がわからなくなってしまっては、何のための説明かわからないと思います。本文に書かれていることがきちんとリスナーに伝わるという事を念頭に置いて、図や表の説明を考えて下さい。

図というのは、特に理科系の本では、例えば生物の発生とか進化の話なら、イモリの実験の図がよく出てくるといふ風に、ある種のパターンがあるわけです。著者がその本のために作った図ではなく、他の本の図で、その中に自分の見てもらいたい所が含まれているような図を引用してくるといふことはよくあるわけです。だから同じ図でもいつも同じ説明というわけにはいかない、本文に合わせてその都度説明を考えなければならぬわけです。このことは図の説明を入れて、本文の前後を通してきてみることで、わかってくるといふ思います。

表の場合には、縦に読むのか横に読むのか決めれば読めるわけで、大きな表も大抵読んでいらっしゃるようですが、ここで具体的な例を挙げて、読み方を考えてみたいと思います。

明治の頃の大阪の話で、大阪市と西成郡・東成区などの畑の作物の話で、地域ごとに作物の割合、売上高と全体に占める割合を表にしてあるわけです。はじめにこのかなり大きな表を読みますが、その後の本文で「西成郡はネギが一番多くて」と書いてあって、私はそこでもう一度表を見て「ネギは40%」と確かめるわけです。それなら、録音する時にも「ネギ(40%)が一番多くて」と40%を言い添えれば、本文をより理解出来るのではないかと思うのですが、こういうやり方がどこまで許されるのでしょうか。表を読んだ時に断っておけば、こういう方法も許されるのではないかと私は思っています。

もう一つ例を挙げてみます。大きな図があって、その一部は今の本文に関係があるけれど、後の部分については3~4頁も先の本文に出て来るといような場合には、始めの所で全部説明しても、関係のある本文が出て来た時には忘れてしまっていることもあるわけです。こういう場合、一つの図は一度に全部説明しなければならないと考えることはないので、最初の時に断っておいて、後の部分は関係のある所へ行ってから説明すればいいわけです。

最後に、私たちがテープを作る時には全員が本を見ているわけですが、読者に届くのはテープです。出来上がったテープを聴き始めて終わりまで、元に戻ってみたり先に進んでみたりしないで順に聴いていけば、内容がきちんと伝わる、そういうテープを目指して下さい。一人一人の能力には限界があり、原本も様々ですから、100%そういうことが出来るわけではないのですが、目標は高く置いて、目指していただきたいと思います。そして、皆で図や表のある本をたくさん読んで新しいノウハウを次々に開発していくことが出来ればと願っています。

## 先月の例文の処理例

### 練習問題1

「話」と「咄」と「噺」<sup>①</sup>

漢字には無限の英知がこめられている。「はなし」もそうで、話<sup>②</sup>、咄<sup>③</sup>、噺<sup>④</sup>を区別している。どう区別するのかを説明すれば、「話」は私たちの会話一般、「咄」は「口にして出す」だから、出すという形式、「噺」は「口にして新しい」から、内容である。

.....などのように形式を問う場合は「咄」を用い、  
.....などは、形式より内容に重きを置く際に用いる、と理解すれば、使い

分けは容易となろう。「昔噺<sup>⑥</sup>」と書かれたりするが、形式であるから本当は「昔咄<sup>⑥</sup>」のほうが正しいと筆者には思える。

芸能の歴史は、どのジャンルにあっても<sup>③</sup>咄と<sup>④</sup>噺、すなわち形式を生み出し、内容を革新する連綿たる努力の継続であった。能、狂言、文楽、歌舞伎、舞踊、落語、講談、浪曲、奇術、常磐津、清元、新内、長唄、演劇、オペラ、ミュージカル、バレエ、その他、これら諸芸能（芸術）の形式は判然と区別され、境界を持つ。その形式内でつねに「<sup>⑤</sup>的内容の新しさに挑戦してきたのである。

## 処理のポイント

下線部分で番号を付けた所は補足が必要と思われる箇所、<sup>⑥</sup>のところは前後でわかるので敢えていれなくてもわかるでしょう。

- ①→ 最初は項目として普通に読み、『ハナシト、ハナシト、ハナシ、オンセイヤクシャチュウ、サイショノハナシハ、ゴンベンニシタ、ツギハ、クチヘンニダス、サイゴハ、クチヘンニアタラシイ、注オワリ。』
- ②→『ゴンベンニシタノハナシ』③→『クチヘンニダスノハナシ』④→『クチヘンニアタラシイノハナシ』
- ⑤→『ムカシバナシ、クチヘンニアタラシイ』または『クチヘンニアタラシイ、ノムカシバナシ』
- ⑥→『ムカシバナシ、クチヘンニダス』又は『クチヘンニダス、ノムカシバナシ』

## 練習問題 2

\*カッコの処理

……ところが、原子炉でウランを燃やすとウラン238の一部は、炉内の中性子を獲得してプルトニウム239（厳密にはウラン239、ネプツニウム239を経由<sup>①</sup>）に変わる。

このようにして原子力発電のいわば副産物的にできるプルトニウムを、その核分裂性という性質を利用して核燃料として再利用することができれば（これを「核燃料リサイクル」とも呼ぶ）、ウラン資源の利用効率が増し、原子力に新しい可能性が開けるかもしれない。これがプルトニウム利用計画のねらいであり、プルトニウムの強い毒性、核兵器材料としての利用可能性という二つの大きな問題点を承知のうえで、なおこのプルトニウム利用を目指そうという人たちが出てくるゆえんである。〈・・・中略・・・〉このようなプルトニウムは、特別な軍事用の生産炉を用いれば生産できる。あるいは、「もんじゅ」のような高速増殖炉の外周燃料（<sup>②</sup>）では、もっと高純度（<sup>③</sup>）のプルトニウムができる。そんな特殊な原子炉を使わなくても、通常の原子力発電所で、短期間（<sup>④</sup>）燃料を照射しても高純度プルトニウムができる。〈・・・〉日本で一般に用いられるプルトニウムは、原発の使用済み燃料を再処理（<sup>⑤</sup>）してつくられる

もので、表序-1に示すように、たしかにプルトニウム239の濃度は低い。〈・・・〉

しかし、こんな言い分は、いまや世界のどこでも通用しない。アメリカの政府の公式見解といってもよい全米科学アカデミー（NAS）報告（一九九四年三月）では、「実質的に、いかなる組成のプルトニウムも核兵器製造のために利用できる」と述べている。

たしかに、原子炉級のプルトニウムには若干の問題がある。それはプルトニウム240が二〇～二五%含まれているからで、これは核分裂そのものには何の障害にもならないが、中性子を発生するので、ねずみ算的な核分裂連鎖反応（核爆発）の引き金を早く引きすぎてしまう「早期誘発」（自燃）の可能性もある。そのために、やや性能が落ちることもあると考えられている。

しかし前に述べたNAS報告では、原子炉級のプルトニウムを用いて長崎原爆と同種の簡単な装置を作れば、最低（自然に発生しても）一～数キロトンの核爆発を起こし、十分に核兵器としての威力をもつ、としている。

つい最近まで、なかなか詳しいことが公表されなかったが、じつはアメリカは、実際に原子炉級のプルトニウムを用いて核実験をおこなっており、きちんとした核爆発を起こさせるのに成功している。最近の発表によれば、その威力は「二〇キロトン以下」程度という。広島原爆（二五キロトン）以上ということかもしれない。

その道では定評のあるアメリカのRAND研究所の報告書（一九九三年三月）によると、原子炉級のプルトニウムを使った場合の（核爆発を起こさせるために必要）臨界質量は、適当な反射材（核分裂の連鎖反応を効率よくおこなわせるために、プルトニウムをとり囲むように配置する金属材。ベリリウムなどが用いられる）を用いるとき、六・六キログラムと推定され、核兵器級のその四割増し程度にしかならず、核兵器をつくるうえで、とくに問題はない。本書は、このような最近の知見のうえに立って、すべてのプルトニウムは核兵器に転用されうる危険性をもった物質である、という認識にもとづいて書かれている。

### プルトニウムの毒性

プルトニウム239をはじめ、プルトニウムの同位体の多くはアルファ線を出す放射体だ。まずプルトニウム239を中心に考えると、その放出する高エネルギーのアルファ線は、通過する行程中に周辺の物質と強い相互作用を起こし、化学結合（とくに人体の場合は骨結合）を損傷するような影響を与える。

アルファ線は大きく、他の物質との相互作用の強い粒子（ヘリウムの原子核）なので、貫通力は弱く（「飛程が小さい」という）、たとえば空気中では、数センチもあればとまってしまう。したがって、プルトニウム239などのアルファ線を出す物質が体外にある場合、一般にはそれによる被曝はあまり問題にならない。とくに何らかのコンテナに入っている場合には、外部に対する放射線の影響は、ほとんど問題にならない。

## 処理のポイント

下線で番号のついたカッコの文章は「カッコ・・・カクコトジ、(又はトジ)」を読み込んだ方がわかりやすいでしょう。■の部分、普通に読んでも意味が通じる部分でしょう。

③の全米科学アカデミー (NAS) 報告 (■) は→『全米アカデミー報告、NAS報告、一九九四年二月は・・・』と読む方がわかりやすいでしょう。

## ☆☆☆☆☆ 今月の練習問題 ☆☆☆☆☆

### 練習問題 1

#### 単漢複合語の話

「単漢複合語」というのは私の造語である。「陥る」のように「落ちる」と「入る」の複合語ながら、「落ち入る」でなく「陥る」と漢字一字で表記するような語を、仮にそう呼ぶのである。

「おちいる」は、“くぼんだ所にはまり落ちる。”の意だが、現代では「穴に陥る」など具体的な動作より、「ジレンマに陥る」など“よくない状態になる。”といった比喩的な用法が普通。意味の変遷を「落ち入る」でなく「陥る」と書くことで対応しているのだ。

「ちりばめる」という語は、少数を除き、ほとんどの辞書は「鏤める」だけで、「散りばめる」は採っていない。「このエッセーには、ところどころきらっとした言葉がちりばめられている」などと比喩的にも用いられるが、元来は“彫って金銀や宝玉などをあちこちに散らしてはめ込む。”という意味。意味から考えると「散りばめる」でも構わなそうだが、表記習慣上あまりそうは書かないということか。「鏤」は表外字なので新聞の表記は「ちりばめる」と仮名書き。

「うずたかい」は、「堆い」と書かれる。タカイは“高い。”に違いあるまいが、「うず高い」とはあまり書かれぬ。ウズには「珍」「埋」など諸説あるが、“盛り上がる。”の意味を持つ古語「うつもる(殖る)」のウツにタカシがついた語形か、という説に説得力を感じる。平安時代まではウツタカシと清音だった。新聞では仮名書き。

「なげうつ」は、「投げ」＋「打つ」で、『国語大辞典』『大辞泉』など辞書によっては「投げ打つ」「擲つ」「抛つ」と、「投げ打つ」の表記を掲載するものもあるが、「投げ打つ」では野球でもやっているみたいな感じがしないでもない。「全財産をなげうって事業に打ち込む」のように“惜し気もなく投げ出す。”という意味に「投げ打つ」を用いるのは違和感が強い。新聞の用字は「なげうつ」と仮名書き。

「巣くう」は、『大辞林』が初版で「巣食う」の表記を採っていたが、第二版で「巣くう」に改められた。“鳥が口に物をくわえて巣を作るところから。”という『倭訓栞』の語源説を可とすれば、「巣くう」の表記も誤りとは言えない。ただ、「くわえる」は「食わえる」とは書かない。「くわえる」と「食う」との語間距離はそのくらい隔たっている。新聞の表記は辞書の多数派通り「巣くう」。

「よみがえる」は、「黄泉」+「かえる」である。「黄泉」とは死者の魂の赴く所で、「よみがえる」はその黄泉から帰ること。“生き返る、衰えていたものが生氣を取り戻す。”という意。漢字では「蘇る・甦る」と書く。原義を考えれば、「よみ帰る」や「よみ返る」でもよさそうなものだが、ほとんどの辞書はそうした表記を採っていない。新聞の表記は「よみがえる」。

### 練習問題2

ラムプ

女、昆布、音楽…。仮名ならばオンナ、コンブ、オンガクで、はねる音はみな「ン」と書く。けれども、「n, m, ん」と、それぞれは違う音だ。d, nなどの前では“n”となり、p, b, mの前では“m”となり、k, gなどの前では“ŋ”となる。石川啄木の歌に「真白なるラムプの笠の瑕のごと流離の記憶消しがたきかな」というのがある。“ラムプ”は発音に近い表記だが、今はこうは書かない。

平成三年六月、内閣告示された「外来語の表記」の留意事項その2（細則的な事項）のⅢ-1に、“撥音は、「ン」を用いて書く。”とあり、コンマ、シャンソン、トランク、メンバー、ランニングなどとともに「ランプ」の語例が載っている。日本新聞協会新聞用語懇談会編『外来語の書き方』にも、「表記の基準」に“はねる音は「ン」で表す。”という一項があり、新聞では「ランプ」と書いている。

### 練習問題3

#### 「卵」を「玉子」と書くのは正しいか

「玉子」は当て字で、漢語では「ぎょくし」と読み、玉でつくった碁石の意味はあっても「たまご」の意味はありません。

しかし、わが国では「卵」の文字から受けるなまなましさをきらったのか、昔からよく「玉子」と書き表されてきました。特に料理関係では「玉子酒」「玉子豆腐」「玉子どんぶり」のように「玉子」と書くのが一般的です。

これに対して生物学的な意味で使われる場合は「卵」と書き、「玉子」は使われません。「金のたまご」「医者<sup>ひふ</sup>のたまご」のように比喩的に使われる場合も「卵」と書き表すのがふつうです。

校正表から

語句	誤	正	語句	誤	正
上場	シヨウバ	シヨウジヨウ	総帥	ソウシ	ソウスイ
造立	ゾウリツ	ゾウリユウ	軽蔑	ケイブ	ケイベツ
音曲	オンキョク	オンキョク	一隻	イツウ	イツキ

二通りの読みがあって意味が異なるもの (59)

後引	<p>アヒキ 満足しないで次からつぎへと物を欲しがること。</p> <p>アビキ 銚子の口を伝わってしたること。</p>	取得	<p>シウトク 所有すること。手に入れること。</p> <p>トリトク 取っただけ自分の利益になること。</p>
見立	<p>ミタテ 見送り。送別、選定</p> <p>ミダテ 見た感じ。みばえ</p>	中入	<p>カカリ 寄席や相撲などの興行で途中でしばらく休憩すること。</p> <p>カケル 中に入れること。またはそのもの。</p>

※ ★ ☆ △ ◇ ◆ ※ ★ ☆ △ ◇ ◆

**Q** ソニーのTC-RX715Tを使って録音していますが、再生音が早くなります。どうしてですか？

**A** ソニーのTC-RX715Tからは、録音スピードが2.4 cm/sと4.8 cm/sと切り替えられるようになっています。このボタンの下についているつまみを右に回すと、再生音を最高100%（倍速）まで早く聴くことができます。（このつまみは録音には影響しません。）つまみの表示は左側に「0」、右側に「10」となっていますが、つまみが「0」にある時は、等速での再生、右にまわしていくとだんだん早くなり、「10」まで回すと「倍速」になります。質問者のケースはこのつまみが少し動いていたのを知らずに再生していたようです。また、余談ですが、2.4 cm/sで録音されると普通の倍の録音が可能ですが、普通のテープレコーダーでは早く聞けませんので注意しましょう。

## 利用者から製作依頼を受けている原本

- 『社会福祉の歴史』高島進著 <社会科学>
- 『フランス史 上』アンドレ・モロワ著 平岡昇訳<歴史>
- 『フランス史 下』アンドレ・モロワ著 平岡昇訳<歴史>
- 『部落起源論』石尾芳久著 <社会科学>
- 『ネットワークビジネス』ドン・フェイラ著 形山淳一郎訳
- 『社会福祉の歴史』高島進 著 <社会福祉>
- 『三本の矢 上』榊東行著 <小説>
- 『三本の矢 下』榊東行著 <小説>
- 『民法（6）契約各論』第4版 遠藤浩他編 <法律>
- 『おなら大全』ロミ&ジャン・フェクサス著 <民族学>
- 『魂の幼児教育』としくらえみ著 <教育>

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

## 今回引き受けて頂いた 原本とグループ

『民法（5）契約総論』第4版 遠藤浩他編	ICCBリクエストグループ
『ディスカバリー世界の真相への接近』<宗教>	〃
『あなたの隣の怖い話 第2弾』	〃
『魂の絆』トマス・ケリー著 中津悠訳 <小説>	テープライブラリーにしのみや
『都忘れ 倉田紘文句集』倉田紘文著	〃
『花神俳句館』倉田紘文著	〃
『ノモンハンの夏』半藤一利著 <日本史>	えくてもあ
『ニュースキン「新たな夢」へ』上之二郎著	〃